

いなかびみ

令和二年九月 第八二号

- ◇ 村の景観と歴史・人物(1)
- ◇ 民具が語る生活史(フロシキ(風呂敷))
- ◇ 方言一考(とんじえね)
- ◇ もの言うもの(火縄銃)
- ◇ 歴史館行事の報告・お知らせ

村の景観と歴史・人物(1)

上関城址と三瀧出羽守政長

渡辺 伸 栄

上関城主三瀧氏の研究を細々と続けています。本紙前号で小林弘氏から貴重な情報を頂きましたので、新連載の初回は氏の続編とします。

森に眠る上関城址

上関集落の温泉橋もと、鬱蒼たる森の中に上関城址が眠っています。ここは出羽国へつながる荒川通り水陸の要衝でした(図1)。林内に今も残る遺構は、近世城郭にも匹敵する縄張り(設計)で、往時の威容が偲ばれます(図2)。

歴代城主は三瀧氏。中でも、出羽守政長の生涯は一編の歴史ドラマです。



政長の栄光と挫折

上杉謙信の時代、その股肱之臣として活躍した政長の記録が、史料に残っています。

一五六一年、將軍足利義輝への使者として上京。この頃、義輝は家臣に脅かされるなど不安定な立場でした。頼りにしている謙信は関東で北条氏と対峙中で、上洛できない謙信に代わって参上した政長に、將軍は名刀を授けます。

一五六九年、謙信の本莊城(村上)攻撃では軍目付(監察)を勤め、平林城主色部勝長の戦



死に際し、後継の頭長を後見して色部家中の動搖を収めるよう謙信から指示を受けています。ところが、一五七八年、突然謙信が病死。景虎と景勝の後継争い「御館の乱」が勃発します。政長は景虎側につきますが、景勝が勝ち、所領を没収され浪人となります。従来、三瀧氏改易の理由は諸説ありましたが、大見安田文書によつて、御館の乱であることは既に明らかです。

中目村での塾居

改易後の政長の消息が、前号小林氏提供の中ノ目の碑文によって、初めて明かされました。名を則長と変え、その地に塾居していたのです。政長の所領の中に「中目村」があったことは、色部史料に明記されています。三瀨は時に水間とも書かれ、碑文の「越後の巨族」で「中目村」に「邑土館を世領」する水間則長は、三瀨政長と同一人物と考えるのが妥当でしょう。

三瀨氏の史料初出は一三四四年で、守護代官として登場し、以降代々阿賀北の守護方役人として活躍します。その後、一四九八年の胎内川合戦に守護軍の案内役として飛騨守が登場して以降、一五五三年に掃部介が川中島合戦で大活躍するまでの五十五年間、史料から消えています。

小林氏提示の高野山過去帳資料を今回改めて入手して調べてみると、その空白期間に、新発田の三瀨（又は水間）が五回、荒川の三瀨が一回、記載されていました。高野山資料初出は一五二一年で、政長以前の早い時期から、役目上、中目村に一拠点置いていたことになり、上関城主の地位を剥奪された政長が身を寄せたのは、三瀨氏縁故のその地でした。

政長の戦死

碑文によれば、政長は一五八六年、景勝の芝田治長攻撃に家臣細野兼長を従え参戦し、武運

拙く主従共に戦死しています。

碑文に「上杉景勝水間則長党」とあることから、景勝側に与（くみ）したと読めます。それに、政長と共に浪人になっていた子長能は、政長戦死の三年前に本莊繁長の仲介により景勝に許され、上関城主となって新発田攻めに加わっています。

とはいえ父の失脚により、前代とは比べもな少少禄での帰参（再雇用）でした。父政長としては、名誉挽回・三瀨家復興を願って死を賭しての奮戦だったのではないのでしょうか。とすれば、老将の見事な最期です。

小林氏に感謝して第一回の稿を終えます。
（出典等詳細は watanobu.com を参照下さい。）

民具が語る生活史

民具⑨ フロシキ（風呂敷）

フロシキは、物を包んだり運んだりするときを使う四角形の布です。平安時代には平包・平裏（ひらづつみ）と呼ばれていました。「風呂敷」という名称は、江戸時代前期の天和・貞享（一六八一〜八八）年の文献に初めてみられ、寛保年間（一七四一〜四四）には定着したようです。

この名称が定着した背景には、江戸時代の銭湯の流行があげられます。宝永（一七〇四〜一〇）のころまでは、今のような湯風呂ではなく蒸風呂だったため、男性は風呂褌（ふんどし）、女性は湯文字（ゆもじ）を身に付けて入っていました。そこで、入浴用品を携帯するために包み布を用いて、風呂場に敷いて衣類を着脱したり、入浴後に足を拭いたり、濡れた衣類を持ち帰るときに使いました。布を風呂敷で敷くので、「風呂敷」に、のちには物を包む布（平包）自体を風呂敷と呼ぶようになります。

風呂敷自体に注目すると、その伝統的な柄には、松竹梅、鶴、家紋などがあり、よく見ていると面白いです。例えば、よく時代劇や漫画などで泥棒が緑の風呂敷いっぱいに荷物を運んでいく姿がありますが、実はあの風呂敷には唐草文様というめでたい吉祥文様の一種が施されています。手近にある歴史館の風呂敷を見ると、紺地に唐草文様・丸に鶴紋・ときおり桐、の意匠で、いずれも吉祥モチーフです。

唐草文様は、どこまでも伸びていくツルの模様が繁栄・長寿を意味します



今では使われる機会がまれになったといわれる風呂敷ですが、関川村ではまだまだ現役で

活躍しています。お盆に親戚の家を訪れるときのお盆礼、正月のお年始、また慶弔の際には酒類を包み、運ぶのに最適です。

世の中では、レジ袋が有料化になったりマイボトルが流行ったりと、エコに努めようとする動きが活発ですが、もしも家に眠っている風呂敷がありましたら再活用はいかがでしょうか。私は先日、大きめの掛軸の桐箱など三箱を運ぶ機会がありました。風呂敷が一番重宝でした！布なのでがさがさという音もなく、縛ってしまえば荷が崩れる心配はありませんし、使わないときは一枚の布となるのでかさ張りません。洗う時だけ、色移りや縮み(ちりめんは縮みます！)にお気をつけください。

さて、ここ歴史館の販売コーナーには、宝暦の大洪水の絵図をモチーフとした風呂敷があります。こちらは平成9年に羽越水害三十周年記念事業の一環として作られ、村内全世帯に配布されたものです。ご来館の際には常設展の『宝暦大洪水略図』（勝蔵の船山久脩きゆうしゅう）氏が明治31年に津野武右衛門家所蔵の絵図を謄写したものと併せてご覧ください。宝暦の大水害と羽越水害の被害箇所は酷似しており、この絵図は防災上貴重な史料です。

参考文献

日本民具学会編一九九七「ふろしき（田村舞子）」

（風呂敷）『日本民具辞典』ぎょうせい出版

方言一考・とんじえね

「とんじえね」は寂しい、もの足りない、心細い、というような意味だ。人により地域により「とぜね」とも「とじえね」とも微妙に違うし微妙な発音で表記も難しいが、コロナで閑散とした道の駅を徘徊しているK氏に「やっぱり人いねばなんぼんめさんでもとんじえねろ」と声を掛ければ「どぜね」と言っても「とじえね」と発音しても通じる。「いやいやゴミも落つてねえしかえつていいがね」と応えたとしても、家での留守番が「とんじえね」のでわざわざ市から村に来てボランテイア紛いの事を使命のようにやっているのである。この「とんじえね」、意味や使い方は分かってても語源が推測し難くて、加藤元吉氏の「関川郷の方言」を開くと「ドヂイナエ」語意「淋しい」備考として「徒然無い」とある。「徒然」を「つれづれ」としか読めない私は手持無沙汰で退屈？と首を傾げたが、もしかして「とぜん」という言葉があるのかも辞書に当たると国語辞典にも古語辞典にも載っている立派な言葉だった。「徒然」を「とぜん」と読んで意味はつれづれと変わらないう。退屈が淋しいというの意味に発展して方言として残っているのだ。「徒然無い」の「無い」は頭痛が痛いのように重複はしているが、語意を強める言葉と解すれば「どんじえねえ」となる。由緒正しき言葉「とんじえね」。(安久)

もの言の・火縄銃

歴史館には村内所有者からお借りした火縄銃二丁が展示されている。ガイドを請われた場合は、この前に立ってありきたりの説明をする。つまりいつ伝来し、どのように普及し使われたか。清聴してくれる良民と判断した場合は、やおら展示ケースから実物を出して、長篠の合戦を見た事の様子に喋りながら撃ち方を説明し、ややもつたいつけながら持ってもらおう。

この武器は日本の戦国時代を変えた。小部隊でも山の高い所に陣取られると弓や槍ではなかなか攻略できなかったが、火縄銃で攻撃することで陥落させられた。弓や馬は使いこなすのに熟練した技術が要るが、火縄銃は大した訓練も必要なく誰でも使えた。但し、一丁何十万もするこの武器を多量に買えるのは経済力のある大名だけで、小さな領主は大きな領主に吸収されて、大きな領主同士の大きな合戦、つまり天下取りの戦いを導いたのがこの火縄銃ということになる。もし火縄銃が日本に伝わるのがもつと遅くなったら戦国時代はずっと長引き、統制のとれていない島国にやってきた諸外国はそれぞれ好きな場所を自分の国の領地にしたかもしれないという説もある。(安久)

歴史館行事の報告

○良寛の歩いた峠を越えて

歴史のある米沢街道は十三の峠を越えて米沢に至るため、十三峠とも呼ばれていました。今年は全五回で十三の峠を歩く計画でしたが、疫病の流行で開始が遅れ、雨での中止もあり、今年あと一回になりました。残った峠は来年計画します。

第一回「鷹ノ巣・榎峠」五月二十四日(日)

総勢十八人

第二回「大里峠」六月二十八日(日)

総勢二十八人

これまでの峠歩きと違い、解説者が二名、多い時は三名もおり、それぞれがそれなりに説明しますので、やたらと休めて大変楽だと好評です。是非ご参加ください。写真は第二回の大里峠。



○夏の美術館巡り

新津美術館「不思議の国のアリス展」

万代島美術館「ドラえもん展」

何れも見所の多い、充実した素晴らしい企画展でした。ただコロナの影響で参加者が少ないのが残念でした。(七月二十三日(木))



みなさんアリスにもしずかちゃんにも負けないくらい
○○でした。



お知らせ

○常設展で渡邊家伝来の酒井抱一の屏風を10月10日(土)から公開します！

○村民ギャラリーで「刀剣展」を開催します。10月10日(土)から12月13日(日)まで。村民所蔵の刀剣の展示です。

○歴史講座第二回「関川村に關係する交通機関」10月21日(水)、第三回「新潟県にはなぜ大地主が多かったのか」11月18日(水)、いずれも村民会館会議室、19時から20時半。講師は関川村歴史文化財調査員の佐藤忠良さんです。

○秋の美術館巡り「魚沼市永林寺・西福寺」越後のミケランジェロ、石川雲蝶(うんちよう)の代表作が残る二ヶ寺を訪ねます。10月26日(月)、参加費3,650円(拝観料・昼食代込)。

○「良寛の歩いた峠を越えて」10月10日(土)、萱野・朴ノ木峠。雨天時は翌11日(日)に順延。

○秋の健康登山「長井葉山(1237m)」、朝日連峰南端の山を登ります。直江兼続が米沢と庄内を結ぶために拓いた朝日軍道を通り、下山します。10月18日(日)、参加費、村民千円、村外の方は二千円。村外の方の参加条件は、一緒に村民の友人・知り合いが参加することです。◎ご来館、ご参加お待ちしております！

いわかがみ

第八二号

発行日

令和二年九月

編集発行

せきかわ歴史とみちの館

tel10254-64-1288 Fax0254-64-0300